

左右田喜一郎の文化価値哲学

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

経済の体制的枠組みが安定している時代とは違って、流動化の兆しが明らかとなったとき、体制の古いあり方についても、新しいあり方についても、根本的な思索が求められる。それが経済哲学である。GDPの成長率が何パーセントであるとか、雇用の形態がどうであるかといった考察は、経済学のテーマであるが、それは経済の外面的な姿をとらえるにすぎない。経済哲学は経済学に関するメタ理論であって、経済の「意味・意義・価値」を問うものである。

世界的に見て、経済哲学という学問領域の確立に貢献したのは、左右田喜一郎（1881～1927）である。彼は明治末期から昭和初期にかけて、主として大正期を中心に活躍した学者である。左右田銀行という家業を継いだために、銀行の頭取であったが、本業としては、一橋大学の前身である東京高等商業学校および東京商科大学において教鞭をとった。若くして死去したために、わずか20年足らずの学究生活であったが、わが国において経済哲学の隆盛をもたらした。彼は道德哲学、法哲学、政治哲学、宗教哲学などがあるのに、なぜ経済哲学がないのかと問い、経済生活の意義を解明することを求めた。経済活動は人間の物質的基礎を与えるものとして不可欠でありながら、金銭や利得にかかわるものとして軽蔑され、一般に哲学の対象にならなかったのである。

左右田は一橋で経済学を学んだ後、主としてドイツに9年間留学し、新カント派の哲学者リッケルトに学び、ドイツ語で二冊の本を書いた。『貨幣と価値』（1909）と『経済法則の論理的性質』（1911）である。日本に帰ってからは『経済哲学

の諸問題』（1917）と『文化価値と極限概念』（1922）を出版した。彼は当時、西田幾多郎（1870～1945）と並んで、国際的に通用する独創的な思想を展開した。西田哲学という名称は、左右田がつけたものである。

左右田の業績が注目に値するのは、二つの理由からである。一つは、その歴史的文脈である。日本に大学ができ、西欧の学問が導入されるようになったとき、日本の哲学界がはじめて直面したのが新カント派哲学であった。リッケルトは自然科学に対抗して、人文・社会科学の基礎を確立するため、「文化価値」の哲学を展開した。人間の活動は価値創造の生活であり、その活動の成果は文化である。人文・社会科学の対象は自然科学の対象と違って、認識目的としての文化価値に関係づけることによって、はじめて取り上げるに値するものとなる。事実認識に先行して価値評価があり、価値が事実の根拠となる。左右田はこの文化価値哲学を経済に適用し、経済を独自の文化領域として確立した。

左右田についてのもう一つの注目点は、彼の理論の内容である。左右田の哲学は、経済学をカントおよび新カント派と結びつけるという独特の試みであった。彼は一方で、経済を貨幣によって測られた経済価値に基づく評価社会とみなし、他方で、人間性を開発し向上させることによって、経済を文化価値実現のための一つの領域とみなした。第二次大戦後、道德哲学において、ジョン・ロールズ（1921～2002）がカントの「道徳的人格」の概念を基礎として、正義の理論を展開したが、左右田はそれよりも広い新カント派的な「文

化的人格」の観念を基礎として、卓越・創造の価値理論を構築した。

哲学は認識論・存在論・価値論を含む。左右田の経済哲学がこの三部門についてどのような特徴を持っていたかを述べよう。まず認識論については、左右田は、経済学の認識目的は歴史的存在としての経済の個別的特性を明らかにすることにあると考え、経済の歴史的文化価値を認識論的基礎とみなした。文化価値は規範であって、規範と関連づけることによってはじめて、経済生活の認識が可能となり、経済学が成立する。そしてこのような経済領域の特定のためには、カント的意味での論理的アプリアリが必要であり、左右田はそのような主導観念として貨幣をあげた。経済的文化価値は、経験的・実質的なメルクマールとしての貨幣の概念に関連づけられる限りで対象化される。したがって、貨幣は、一方で、経済活動の貨幣的評価を通ずる社会統合という機能と、他方で、経済的価値とその他の文化価値との対比を通ずる社会評価という機能を果たす。前者は存在の問題であり、後者は規範の問題である。後者は社会の中での経済の位置づけにかかわる。

次に、存在論についていえば、リッケルトが文化価値を経済学の認識的基礎としたのに対して、左右田はさらに文化価値の具体的内容として、「文化創造」という概念を導入した。人間の活動が意味や価値を持つのは、それが創造的なことを行うからである。文化価値を根拠づけるものは、文化を創造する「創造者価値」である。この概念はシュンペーター（1883～1950）の革新概念を想起させる。シュンペーターは革新の過程について楽観的であったが、左右田はそこに悲劇とディレンマを見出した。革新は慣行的な経済の軌道を破壊し、新しい経済の秩序を形成する。それと同じように、文化創造は既存の文化秩序を破壊し、新しい文化価値を形成する。しかし、経済においても、その他の文化領域においても、既存の秩序は創造への障害となりがちである。新旧のバランスが社会の停滞と発展を左右する。したがって、文化価値と創造者価値との関係は、対立と統合をは

らんだ弁証法的発展を意味するのである。

最後に、価値論ないし倫理学については、左右田は、一方で、社会の文化価値と個人の自律的創造との調和を可能にし、他方で、社会の経済的文化価値とその他の文化価値との調和を可能にするような社会的制度のあり方を論題とした。そのような制度は、根底において、「文化的人格」としての個人の啓蒙・教養に依存している。左右田の文化価値哲学の観念は、人間の能力を開発し、人格を陶冶し、道徳を身につけ、文化理念を実現するという、大正期の教養主義・人格主義・文化主義の流行をもたらした。明治期を通じて、西洋文物の輸入は表面的な西洋化を招いたが、左右田はそれを厳しく批判し、文化創造の中に人格の尊厳を求めたのである。

左右田は経済哲学の建設に当って、さまざまな価値の間に高低のヒエラルキーを認めなかった。リッケルトの文化価値は、人間活動を統御する包括的規範であって、真・善・美・聖といった抽象概念を最高位に置いた。左右田は、それを否定し、経済的文化価値を他の価値と同等の位置に置いた。経済哲学を主張する段階では、それは有効な戦略であるかもしれない。しかし、経済を含む社会制度の設計を考え、経済活動の倫理的性質を反省するときには、価値のヒエラルキーを構想しなければならないはずである。彼の早世はなお多くの仕事を残したと言わざるをえない。

彼の倫理学は、人間存在の卓越・創造を中心とする「徳」の倫理学であった。それは効率を中心とする「善」の倫理学に優先し、「善」の種類や性質を批判的に評価する立場である。しかし、人間存在および活動の多元性を保証する「正」の倫理学は、「徳」および「善」の倫理学よりも優先すべきものである。そしてこのような価値論を認識目的として、経済学の存在論と認識論が再構築されなければならない。今日求められているのはこのような経済学であろう。

しおのや・ゆういち 財団法人家計経済研究所 会長・一橋大学 名誉教授。経済哲学・経済思想史専攻。